

ひ ふき だけ
火 吹 竹

岡崎むかし館蔵

火吹竹はカマドや七輪^{しちりん}などで煮炊き^{にた}をし、マキで風呂^{ふろ}のお湯を沸かしてしていた頃、どこの家にも必ずあった道具です。火を吹き起こしたり、火力を強めたりする時に用いられ、竹の性質を上手^{じょうず}に利用して、各家で使いやすいように作っていました。材料となる竹は、裏山や川端などから2～3年経た直径3cm前後で、節と節の間が広いモノを選びます。火吹竹として丁度いい材料を選ぶことが一番大変で、「女竹^{めだけ}が良い」(細くて節が長い^{たなばた}ため)とか、「七夕^{たなばた}(旧曆^{きゅうれき}のため現在の8月中旬)以降に切った竹が良い」(割れにくく、虫が入りにくいとされる)などの言い伝えを聞いたりします。作り方は、竹筒の一端に節を残し小さな穴をあけ、他の節は空気が通るように大きめに穴をあけます。残した節と反対側の端を口に当てて息を吹き込むと、先端の小さな穴から勢いよく空気が出ます。筒の長さにも工夫があり、火のたき口が地面に近い風呂用は長め、昭和初期以降^{かわら}の瓦やタイル張り製のカマドは、たき口が地面より少し上にあるため、筒は短めでした。

また、地方によっては喜寿^{きじゅ}(77歳)や米寿^{べいじゅ}(88歳)における長寿^{いわ}の祝いモノとして火吹竹を作って配る風習もあるそうです。それだけ、人と関わりの深い身近な道具であったと言えます。